

ホロライブがいる世界に転生したのになぜか特典がガンダム?!

CLOSEVOL

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

しがない男はある漫画、映画が好きだったその作品の名は機動戦士ガンダムサンダーボルト

彼はその地球連邦側の主人公イオ・フレミングが好きだったしかし彼は死に転生することになり特典はガンダムだがなんと、その世界はホロライブだった!?

戦闘ありですが基本的に日常書きたいだが戦闘は多くなるだろうな

目次

転生したのはいいがなぜこの世界？

転生したのはいいがなぜこの世界？

よう、俺は機動刈谷そこらへんにいる転生者だ。え？転生者はそこらへんにいないて？たしかにな。

転生者てのはホントだなぜか白い空間にいたんだぞ？しかもそこで、「あなたは死にました」って言ってるんだぜ？完全なるテンプレだな。

その後俺は転生した、ホロライブの世界にな…なんでたよ！ガンダムサンダーボルトが良かったよ！まあ俺は普通に人間だった。

で、転生特典なんだが…ガンダムだ。まじでガンダムだ、しかし結構、程度絞られてる。

まあ満足だったのはフルアーマー・ガンダムサンダーボルトverがあることだったな。そして俺の特典なんだが損傷や、武装の補充に修理は俺が使つてないときに進むらしいがその間は使えねえ。

いや使えるが完全に力を引き出せない。そのためアトラスガンダムがあつたのは驚いた、あと顔はイオ・フレミングと瓜二つだ声もな。俺の友にガンダムオタクがいるんだがそいつなんて言ったと思う？

「イオ・フレミングそっくりなら…あのセリフ言ってくれよ！」

「あのセリフ？…俺が知ってるやつでいいか？」

「なんでもいいから！言ってくれ！」

「そうかなら。」

俺はこういったさまあイオ・フレミングならこのセリフ！

「ジャズが聞こえたら、俺が来た合図だ…」

「はあ…」

そういったあと友は倒れて「悔いはない」というもんだからなら、焦ったわ！まあそいつとは腐れ縁だなで今、俺は仕事してるんだがなちよつと問題があつてなそれは

「おはようございまーす。」

「おう、おはよう。」

今、ホロライブの事務所で働いている。え？なんでかって？実は元々前世がコンピューターを使う仕事が多くてな、ホロライブの世界

だし、いつそうホロライブに就職しよう！と、思ってた試しに行ったら受かつちまったぜ。

まあそれなりに忙しいがそしてホロライブアイドルたちなんだが「おはようー！」

「朝っパラから元気だな白銀。」

「むくノエルで言いつててるのに。」

「わりいな癖だからよノエル。」

「癖か…なら仕方ないか。」

(納得すんのはえな)

まあ身近に接してくれて助かってる。にしても平和だなくこれならガンダムを使わずに済むな。

まあこんな世界で使いたくないけどでも使わざる負えなくなるんきが来るな。あの神はとても優しかった例えるなら優しい親父、頼れる存在だなしかもかなり気づかってくれるしな。

そんな人が無闇矢鱈にガンダムを特典にするバズがないさて仕事仕事と。

よしこれで最後！

「つゝ！終わった〜！」

「お疲れ様です、何か飲みますか？」

「すまねえななら…ココアをれてくれないか」

「はい、わかりました」

…今更だが友人 a またの名をえーちゃん普通にモテそうだがな。気遣いがいいしよく相談にも乗ってくれるはあ…前世でもあんない姉ちゃんと会えたら良かったのになあ。現実には厳しいはあ…

「はい、ココアです」

「ありがとう」

俺はコップを受け取り、少し飲む。うまいココアの甘みと牛乳の甘みがマッチしてやがる！しかもココアパウダーは少なめか？ココアの味が強くなえ！うまい！こんなココアは初めてだ！

「うまいなこのココア」

「気に入ってもらってけっこうです」

やべ、声に出た。まあそれぐらいうまいがなさてと今日はこのくらいにするか俺は荷物をまとめ始めた。

え？終わるのが早いって？もともとけっこう作業は早くできる方だったしな。あと社長が気づかって少し簡単だったのも理由の一つだ

「上がるぜ」

「はい、お疲れさまでした」

俺は部屋を後にし事務所を出た。多分今回の仕事が少なかったのは、俺にどれだけの力があるか試したかったんだろうな。

「さて」

俺はスマホを取り出しジャズを聞く、ただしイヤホンをつけてな！

「♪♪♪」

完全にノリノリだがしつかり前を見るぶつかったらわりいからな、さてと

「ついてきてるな」

俺は後ろから付けてくるやつを気づかれないように見る。てかでけえ角が見えんてるんだが？

（あれでバレねえと思ってるんのかよ）

（取り敢えず誘いこむか）

俺は適当な場所へ歩いて向かう

そこは廃墟のビルまあ、全然怖くねえがさてと

「俺になんか用事でもあんのかよ」

俺は振り向きそう言う…おい角がビックでなったが？

「ふふ、よく吾輩の隠れを見破った！」

「いや、角見えてたからな。」

なんか膝ついて「一生の不覚！」とか言ってるが…こいつらどこかで？

三人称サイド

「取り敢えず。お前ら誰だ？」

「ふふ、いいだろう、お前に教えてやろう！」

このとき刈谷は（なんだこいつ）と内心思っていた

「総帥、ラプラス・ダークネス！」

「女幹部、高嶺ルイ。」

「研究者、博衣こより。」

「え、えつと。」

「無理しなくていいぞ。」

「…沙花叉クロエです…／＼」

「風真いろはでござる！」

「我がが！」

「…秘密結社h o l o o X！（です／＼）」

秘密結社h o l o o Xそれに刈谷は聞き覚えがあった、そして思い出した

「なんだ、6期生か。」

「今、思い出したでござるか?!」

「当たり前だろ、お前ら殆ど事務所に顔出さねえし。」

「堂々としている秘密結社があるか！」

「それでも少しは顔出せ…あと今堂々としてるだろ。」

「…あつ…」

「今気づいたのかよ。」

今更気づいたことに刈谷は呆れる、そして本題を聞く  
「で、なんで俺の跡をつけてたんだ？」

「それはこよりが説明してくれる。」

(知らねえんだな)

ラプラスは何も知らないんだと察した

「実は特殊なエネルギーを探知する装置をつくたんですよ♪」

「へえ、それになんで俺が関わってくるんだ？」

「実はですね試しに使ってみたら——あなたから反応がありました。」

「?!(まさか転生特典のフルアーマー・ガンダムとアトラスガンダムか

!?)へ、へえそうか、なんでたろうな。」

「…何隠してません？」

「なんで、俺がお前らに隠し事しねえといけねえんだよ、取り敢えず俺は帰るぞ。」

(ここから離れよう、アイドルと戦闘は真つ平ゴメンだ!)

光が差す外へと出ようとしたが何かとぶつかる

「は?」

「あ、逃げられないようにビル全体にバリアを貼りました♪」

「…まじかよ。」

と落胆していると後ろから殺気を感じ、横に回転し逃げる

「危っね!」

「かわされたでござる。」

「なかなかやるね。」

「おいおい!俺を殺すつもりかよ!」

「総帥から力を試せと言われたでござるから…あとこのぐらいでも刈谷殿は死なないでござる。」

「ちっ!」

刈谷は走り出した

刈谷サイド

どうする!どうする!頭を回せ!取り敢えず今は逃げる!多分、イオ・フレミングならすぐにフルアーマー・ガンダムを体にまとって戦うと思うが俺は俺だ!

「はあはあ、!危ねえ!」

取り敢えず生きること考える!フルアーマー・ガンダムは最終手



段だ！

「はあ、こいつは。」

鉄パイプ…無いよりマシかと、ちょうど来たな

「来いよ。」

「行くでござる。」

「行きます。」

鉄パイプ持ってくれよ！

「はあはあ。」

「ここまでござるな。」

「呆気なかったね。」

負けました、勝てるわけねーわ鉄パイプでまあ刀を受け止めてくれ  
たけど終わりか

（諦めるのかよ。）

誰だ？なんか聞いたことがあるがてかあれ？時、止まってね？

（俺と同じぐらい似やがって、その程度かよ。）

（ま、まさかイオ・フレミング？）

（正解だな、君には百点をやろう。）

（こんな状況でよく冗談が言えるな。）

（実際、危険なのは俺じゃなくてお前だからな。）

（あんたには関係ないか。）

（ああ、でもな。）

すると、イオは俺に近づき俺を殴る

（何すん—）

（何てめえ諦めてんだ！）

（何って。）

（てめえには俺が使ったガンダムがあるだろ！）

そうだ、何諦めてんだ

(俺はあんたみたいに、戦場は嫌いだ。)

(あ？何言って(だが))

(俺は、この世界のイオ・フレミング、機動刈谷として戦う。それだけだ。)

(吹っ切れたみたいだな)

(ああ、お陰様でな)

そして周りが崩れ始めた

(ここでお別れだ、あばよそっちの俺)

(ああ、あばよ宇宙世紀の俺)

そして時が動き始めた、いろはの刀は俺に向けて来ているそれにお俺は

「っ！」

「な、何をしてるでござるか?!」

止めた片手でな…いて！そりゃ刃物だしなしかも自分の手で止めてるから余計にいてえ取り敢えず！

「おらー！」

「げぶー！」

いろはの腹を蹴る同時に刀から手を離す、しばらくは立てねえだろうなあと

「おらー！」

「ぐぶー！」

クロエには腹パン、俺が刀を止めたことにに啞然としてたからな

「楽しませくれよ」

「何を言ってる？」

「——ガンダム！」

俺はフルアーマー・ガンダムをまとう、

「「え?!」」

まあ驚くよな急に人が変なのになるんだからよさ  
「暴れるか…」

俺はそういった